

小林 登「子ども学」賞の 誕生とその未来

沢井佳子（日本子ども学会常任理事、小林登「子ども学」賞 運営委員）



2023年、日本子ども学会に小林 登「子ども学」賞が誕生します。日本子ども学会の創設者で、初代理事長である小林 登先生のお名前を冠した、子ども学の学術賞です。2003年11月に、日本子ども学会の設立集会在、東京の白百合女子大学で開かれてからちょうど20年。今年9月に、本学会の学術集会・第19回子ども学会議が、同じ白百合女子大のキャンパスで開催され、その折に第1回小林 登「子ども学」賞の授賞式がおこなわれる予定です。

受賞候補者は、会員の方から推薦された個人や団体であり、本賞の運営委員会へ3月末までに推薦書が提出された方々です。そして、4月から8月にかけて審査委員会で審査・選考がなされたのち、日本子ども学会理事会の承認を経て、受賞者が決定されます。今年子ども学会議は、本賞の最初の受賞者をたたえる、記念すべき学術集会となるはずですが。

お別れの寂しさと 賞の発案

小林 登「子ども学」賞が誕生するまでの経緯を振り返りますと、その発案がなされたのは2019年12月27日夕刻に開催された、日本子ども学会常任理事会でした。議題として彦根における第17回子ども学会議の検討等が予定され、榊原理事長、安藤副理事長、太田副理事長はじめ11名の常任理事が集ったのですが、

会議は哀しみと寂しさに包まれていました。前日12月26日の晩に小林 登先生が、92歳のご生涯を終えられたという訃報に接して間もない時であったからです。次年度子ども学会議について話し合う時も、かつて常任理事会で多くの提案をなさった小林先生の、朗らかな顔が思い浮かぶのでした。

「一番嬉しかったことは何ですか？」と先生にお尋ねした時のことを、私は思い起こしていました。「それは、武見記念賞をいただいたこと。受賞理由が『子ども学』であったのが、嬉しかった」と、先生が満面の笑みでお答え下さったのは、2015年11月の米寿のお祝いの頃でした。小児科医として、既に国内外の榮譽ある賞や勲章を数多お受けになった先生も、「子ども学」を体系づけるご業績が取り上げられ、受賞という形で高く評価されたことを喜んでいらしたのです。その懐かしい思い出に促されるように、「小林 登先生のお名前を冠した、子ども学の賞を創りたいものですね」と、私は会議の席で申したのですが、そこにいらした常任理事の方々がご賛同くださり、早速に、賞のプランのたたき台をつくる宿題を頂くことになりました。小林 登先生のお名前と子ども学という体系…ふたつの名称を結ぶ賞には、どのような骨格と役割が求められるのか……を考え始めた年の瀬でした。

その4日後の大晦日にとりおこなわれた、小林先生の告別式では、在りし日のお姿が、フィルムの断片を次々につないだ映画のように、臉に浮かびました。

1987年の夏、国際行動発達学会に集った海外の研究者らが、国立小児病院の研究センターを訪ねた時、白衣の小林先生は、赤ちゃんのエントレインメントの動作解析について、機器を指し示しながら澆刺と解説していらしたのです。工学のテクノロジーを導入して、ビデオ映像、ポリグラフ、サーモグラフィーなどを連携させ、親子のコミュニケーションを生理的にも社会的にも分析する研究は、「子ども学」研究のモデルと

いえるものでした。

また、1988年にお茶の水女子大大学院へ、先生が特別講義にいらした時、大学院生で妊婦でもあった私に、医療文化人類学者のDana Raphael先生を囲む研究会を企画するようにと、お任せくださったことは忘れ難い思い出です。文化人類学の原ひろ子先生ほか、多彩な専門家を集めて、Raphael先生のドーラ研究や子どもの虐待の問題について議論し合った研究会は、まさに子ども学会議の雛形のようなものでした。

このように専門の垣根を越えて話し合い、知識を共有する喜びに満ちた時は、先生が所長でいらしたチャイルド・リサーチ・ネットの研究会をはじめ、プレイショップやメディアキャンプなどのイベントでも花開き、2003年の「日本子ども学会」の設立で実を結びました。2004年9月の早稲田大学国際会議場における第1回子ども学会議の基調講演「子ども学とは何か—育つ育てる」をお話しになる小林先生の晴れやかなお顔。座長を務めた私の心も喜びに満たされました。臉に映る、名残惜しい面影を追って、2019年最後の日に、先生をお見送りしたのです。

パンデミックのトンネルを走るオンライン

年が明けて2020年、小林登先生のお名前を冠した賞の創設を、令夫人の小林滋子さまにご承諾いただいた頃、テレビのニュースは、中国の武漢で広がる感染症が深刻であることを報じていました。「昔の小児科医は、感染症の子どもを治すのに忙しかったけれど、今の小児科医は、子どもの心の問題で忙しい。だから医者も、いろんな専門家と一緒に子どものことを話し合わないといけないね」と、小林先生はおっしゃっていましたが、百年ぶりのパンデミックのトンネルは、すぐそばまで近づいていたのです。国内の感染者数が毎日報じられるようになると、会合は次々とキャンセルされ、春以降は、保育園や学校も閉じられて、「危機にある子どもたち」の成育環境が、世界的な問題となりました。

学会の会議もオンラインとなり、東京オリンピック2020と同様、第17回子ども学会議の開催も延期される中、とにかくゴールを定めようと、「2023年の子ども学会議で第1回の授賞式を開催する」という目標を立て、理事会に承認していただきました。

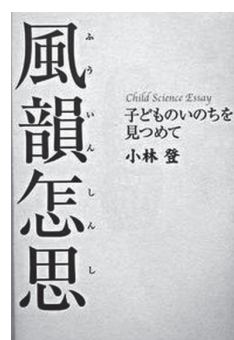
そして、学会事務局と理事長の榊原先生を中心に、

賞の準備委員会を組織し、理事の方々からも情報を募って、既存の学術賞の内容や規程についての下調べが始まりました。賞の規程については、理事の安倍嘉人先生が、元判事で弁護士というお立場からご助言をくださり、公正な授賞事業のための組織づくりがオンラインで始まりました。

ヒューマンサイエンスとしての「子ども学」のパノラマ

2021年10月には、第17回子ども学会議が1年遅れで彦根の滋賀県立大学で開催され、対面とオンラインのハイブリッドで準備委員会が開かれました。賞の名称をく小林登「子ども学」賞と定め、賞の趣旨の起草に取りかかったのです。この作業は、小林先生が構想なさった「子ども学」をどのような景色のパノラマで描くのか…を話し合う機会となりました。「子ども学は、人間のすべてを科学という基盤からとらえる人間科学である」という、小林先生のおっしゃる「人間科学」という言葉が、人文科学の類語だと誤解されないように示す必要もありました。

海洋軟体動物を研究する英国の神経生物学者、J. Z. Youngが、人間の生物的側面も社会的側面も対象にした研究を包括し、「ヒューマンサイエンス」と呼んで体系化したこと…それが「人間科学としての子ども学」という小林先生の構想へ受け継がれていることは、小林先生のご著書『風韻怎思—子どものいのちを見つめて』（小学館）や『子ども学のまなざし—「育つ力」と「育てる力」の人間科学』（明石書店）の中で述べられています。実際、過去3年にわたるCOVID-19のパンデミックの経験を通して私達は、生物的存在としての子



『風韻怎思—子どものいのちを見つめて』（2005年）



『子ども学のまなざし—「育つ力」と「育てる力」の人間科学』（2008年）

どもをよく観なければ、社会的存在としての子どもをケアできないことを痛感し、子どもの人間科学において、自然科学的な基盤が重要であることを改めて学んだわけです。

なお、先ほどの J.Z. Young は、数学者でコンピュータ科学者の A.M. Turing との交流を通じて、脳の機能を神経細胞のネットワーク・システムとして考え、生命活動におけるプログラムの重要性を 1970 年代から唱えていました。小林先生は Young と同様のシステム論に基づいて、子どもを「生命のシステム」とみなし、子どもの心身内部のネットワークと外部の社会のネットワークとの間の、情報の行き来に注目なさっていました。それは、情報学的な「子どもモデル」といえるものでした。

「ヒューマンサイエンスとしての子ども学」、そして「生命のシステムとしての子どもを探究する子ども学」。このように幅広い領域をカバーする子ども学の、研究と実践の仕事が、小林 登「子ども学」賞の対象となることを示してゆこうと、準備委員会の中で議論と検討が続けられました。

かくして小林 登「子ども学」賞の趣旨は、次のような文章にまとめられたのです。

本賞は、自然科学や人文科学を包括し、子どもにかかわる学際的・環学的な学問領域において、子ども研究を深め、創発する業績、並びに、子どもの生活環境を豊かにする育成デザインの開発や、子どもの問題の解決に寄与する実践などに すぐれた業績を挙げた人々（個人あるいは団体）を顕彰するものです。そのことにより、人間科学に関する多領域の関係者でそれらの成果を共有し、小林登先生が提唱された「子ども学」への社会的関心を高め、子どもの幸せに資する知識の深化や、社会システムの構築へと つなげてゆくことを目的とします。

賞が未来へ届けるものは

2022 年 10 月に第 18 回子ども学会議が岐阜の東海学院大学で開催された時の総会で、小林 登「子ども学」賞の創設と、学会員から受賞候補者の推薦を募ることが発表され、11 月から賞のウェブサイトで推薦の受付が始まりました。そして 2023 年 4 月から、審

査委員会（安倍嘉人、安藤寿康、内田伸子、木下 真、小林美由紀、竹林洋一、渡辺富夫）と、運営委員会（榎原洋一、一色伸夫、太田美代、沢井佳子、所 真里子、劉 愛萍）[敬称略]が活動を開始し、初めての受賞者を選考する作業に入ります。賞という器の誕生です。

さらに 2023 年 4 月には、こども基本法が施行され、こども家庭庁が設置されます。子どもについての政策論議が盛んになる今こそ、「子どもについて広く話し合うための、共有の基盤となる学問体系をつくる」という小林先生のご遺志に応える人が求められます。

新しく誕生した小林 登「子ども学」賞が、一人ひとりの子どもに寄り添って考える人を励まし、望ましい成育環境を未来へ届ける一助となりますようにと願ってやみません。



国立小児病院時代の小林登先生